

メール交換による継続的な異文化接触場面--日本人参加者の評価を中心に (<特集>インターアクションのための日本語教育 : 実践日本語の理論と実際)

著者名(日)	吉田 千春
雑誌名	異文化コミュニケーション研究
巻	21
ページ	121-141
発行年	2009-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001024/

メール交換による継続的な異文化接触場面 ——日本人参加者の評価を中心に——

吉 田 千 春

On-going Intercultural Interactions by E-mail Exchange: Focusing on the Evaluations of Japanese Participants

YOSHIDA Chiharu

This paper focuses on native Japanese speaking students' evaluation of e-mail interaction with exchange students learning Japanese. On the basis of the data collected from e-mail exchange, questionnaires and follow-up interviews, this study aims to analyze how native Japanese students evaluated their foreign counterparts according to the language management theory. This study also attempts to examine the types of linguistic, sociolinguistic and sociocultural problems as well as changes which occur in on-going intercultural interactions via e-mail. The findings show clearly that some problems were noted by the Japanese students while some were not. In addition, it is found that most problems were sociolinguistic-related. It is also interesting to find that many problems were remedied within the first one and a half months of interaction.

キーワード: メール交換、異文化接触場面、インターアクション、評価、言語管理

1. 研究の背景と目的

近年、コンピューターを媒介としたコミュニケーション (CMC: Computer-Mediated Communication) の発展により、電子メールが幅広く利用されている。

日本語教育においても 1980 年代後半から、電子メールを利用したパソ

コン通信 (中島 1993; 才田 1997)、作文の通信教育 (石田 1996)、プロジェクトワーク (板倉・中島 2001) などの様々な活動が授業に取り入れられ、その学習効果が報告されている。電子メールは時間を共有しない、文字表記によるコミュニケーションであるが、対面場面のような相互コミュニケーションを可能にするという特徴から、言語教育への新たな可能性が示唆されている (北出 2006)。

しかし、電子メールは文字を媒介とするコミュニケーションのため、日本人同士であっても問題が起きやすいと考えられる。例えば、対面場面では得られる非言語情報が得られないため、意図したメッセージが正確に伝わらないことがある。また、非同時性であることから、返信がない場合、誤解を招き、人間関係に悪影響を与える可能性もある (佐々木 2008)。これらは、文化背景の異なる接触場面であればさらに大きな問題につながるであろう。

ネウストプニー (1995) は、外国人と日本人がインターアクションをする際、言語、社会言語 (文法外コミュニケーション)、社会文化の3つのレベルで問題¹⁾が起こるとしているが、このことは、電子メールにおけるインターアクションにおいても同様に生じると言える。

本研究では、留学生と日本人学生のメール交換におけるインターアクションに焦点を当て、言語管理理論²⁾に基づき、日本人学生が行った評価を分析する。これにより、次の2点を明らかにする。

- 1) 日本人学生が何を問題とし、何を問題としないのか。
- 2) 継続的なメール交換により、日本人学生の評価がどのように変化するか。

2. 調査概要

2-1. メール交換の実施方法

今回メール交換を実施した「実践日本語³⁾ (レベル2)」は、実際使用場面をコースに取り込み、インターアクション能力の習得を目指すコースである。また、レベル2はカレッジで約1年日本語を学習した初級レベルの学生を対象としており、留学生に身近な場面を設定し、トピックシラバスで

授業が行われている。

本研究の対象となるメール交換は 2007 年秋学期⁴⁾の 9 月 28 日から 12 月 18 日まで実施され、留学生 1 人と日本人学生 1 人のペアで行われた。メール交換を始める前にペアになる留学生と日本人学生の顔合わせを行い、その後、基本的に週に 1 回メールを書くことを目標とした。また、メール交換はインターアクションの宿題であったため、全てのメールを教師に送り、留学生が書いたメールに対して後日フィードバックを行った。

メール交換の主な目的は、実際使用場면을促進すること、日本語の読み書き能力を向上させること、社会文化知識を得ることの 3 つである。

2-2. 調査対象者

メール交換の参加者は日本人学生 (NS) 10 名、留学生 (NNS) 10 名である (表 1)。日本人学生は 10 名とも語学専攻の学生で、学内のメーリングリストで募集を行った。また、留学生は全員 2007 年 9 月に来日した学生で、半年または 1 年の短期留学生である。

2-3. データ紹介

対象となるデータは、授業で行われたメール交換のデータ、学期終了時に行なわれたアンケートとフォローアップインタビュー (以下 FUI) の 3 つである。

アンケートは、今回実施したメール交換について幅広く意見を聞くことを目的に「メール交換をして良かったこと」、「難しかったこと」などの 6 項目について記述式で回答を得た。

FUI はメール交換に対する意識を探ることを目的に「メール交換で気になったこと」、「メール交換を通して変わったこと」などを中心に、約 30 分から 45 分のインタビューを行った。全ての会話は録音し、文字化を行った。FUI の協力者は日本人学生 7 名 (NS2, 3, 4, 5, 7, 8, 10)、留学生 7 名 (NNS1, 5, 6, 7, 8, 9, 10) である。

表1 調査対象者の属性

ペア	日本人学生				留学生				
	NS	性別	学年	専攻	NNS	性別	学年	国籍	母語
ペア1	NS1	女	1年	英語	NNS1	男	3年	ブラジル	ポルトガル語
ペア2	NS2	女	2年	英語	NNS2	女	2年	アメリカ	英語
ペア3	NS3	女	1年	英語	NNS3	女	3年	アメリカ	英語
ペア4	NS4	女	2年	英語	NNS4	女	2年	アメリカ	英語
ペア5	NS5	女	2年	ベトナム語	NNS5	女	4年	ベトナム	ベトナム語
ペア6	NS6	女	2年	英語	NNS6	男	3年	アメリカ	英語
ペア7	NS7	女	3年	英語	NNS7	男	3年	アメリカ	英語
ペア8	NS8	男	1年	韓国語	NNS8	女	3年	インドネシア	インドネシア語
ペア9	NS9	女	2年	ポルトガル語	NNS9	男	3年	ブラジル	ポルトガル語
ペア10	NS10	女	3年	英語	NNS10	女	3年	アメリカ	英語

3. 分析の枠組み

3-1. 言語管理プロセス

分析はメール交換が行われた際のプロセスに注目するため、ネウストプニー (1995) の「言語管理理論」に基づいて行った。言語管理理論では、人は言語を使用する際、生成するだけでなく同時に管理もしているとし、管理のプロセスを5つの段階で表している。最も簡単な管理プロセスの形は次の図1の構造になっている。実際のプロセスは多くの場合これより複雑な形をとる。

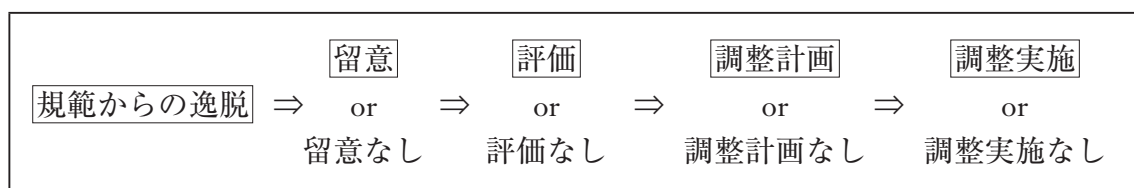


図1 言語管理理論のプロセス

今回の日本人学生の管理プロセスは次のようになる。

- 1) 留学生とのインターアクションに違和感が生じる。(逸脱)
- 2) 日本人学生がその逸脱に気づく。(留意)
- 3) 日本人学生がその逸脱に肯定的または否定的な評価をする。(評価)
- 4) 日本人学生が調整行動を計画する。(調整計画)
- 5) 日本人学生が調整を実施する。(調整遂行)

3-2. 言語管理理論における「評価」の種類

言語管理理論における「評価」は次の3種類に分けられる。

- 1) 肯定的評価: 「良い」、「面白い」などと肯定的に評価されたもの。
- 2) 否定的評価: 「良くない」、「変だ」などと否定的に評価されたもの。
- 3) 評価なし: 留意はするが「特に気にならない」などのように肯定的にも否定的にも評価をされなかったもの。

3-3. インターアクションの問題となる要素

ネウストプニー (1995, 73-74 頁) の定義を参考に、メール交換におけるインターアクションの問題を次のように分析する。

- 1) 言語的要素: 文法、語彙、表記、文の構造に関するもの。
- 2) 社会言語的要素⁵⁾: 言語以外のコミュニケーションに関するもの。
ここでは今回のメール交換で見られた5つのルールを取り上げる。
 - ① セッティングのルール: いつ、どこでコミュニケーションをするか
 - ② バラエティーのルール: 言語のどのバラエティーを使うか
 - ③ 内容のルール: 何をコミュニケーションするか
 - ④ 形のルール: 発話行為の中で内容をどう配列するか
 - ⑤ 媒体のルール: どんなコミュニケーション・チャンネルを使うか
- 3) 社会文化的要素: 言語及び社会言語的要素以外の実質的な行動に関するもの。

3-4. メール交換の時期

約2ヶ月半に渡るメール交換におけるインターアクションの変化を分析

するため、メール交換が行われた時期を二分した。最初の約1ヶ月(9月28日～10月31日)を「前期」、後半の約1ヶ月半(11月1日～12月18日)を「後期」として分析を行った。12月はテスト期間があり、主なメール交換は10月と11月に集中していたため、このような期間設定とした。

4. 分析結果

今回、日本人学生が行った評価は32項目であった(表2)。

前期と後期の評価の割合を比べると、前期は「肯定的評価: 29%、否定的評価: 53%、評価なし: 18%」と否定的評価が半数以上を占めたのに対し、後期は「肯定的評価: 53%、否定的評価: 33%、評価なし: 13%」と肯定的評価が半数以上を占め、逆転している。また、インターアクション別に見ると、言語的要素は「前期: 35%、後期: 27%」、社会言語的要素は「前期: 65%、後期: 60%」、社会文化的要素は「前期: 0%、後期: 13%」で、前期も後期も社会言語的要素が最も多く評価の対象になっていた。

表2 評価の対象となった項目

要素	項目	項目数
言語関連	・ 漢字の使用に関するもの	2
	・ 表記(漢字・カタカナ)の誤用に関するもの	4
	・ 文法・語彙の誤用に関するもの	4
社会言語関連	・ 記号、顔文字に関するもの	1
	・ 名前の呼び方に関するもの	2
	・ 文体に関するもの	4
	・ メールの長さに関するもの	2
	・ 内容に関するもの	3
	・メールの形式に関するもの	5
	・メールの頻度に関するもの	3
社会文化関連	・ 異文化交流に関するもの	1
	・ 友達に関するもの	1
合計		32

4-1. 前期に見られた評価

4-1-1. 肯定的な評価

4-1-1-1. 言語的要素に関する評価

FUIで「漢字の使用が多くて驚いた」、「表現の使い方が上手だと思った」など、日本人学生の期待以上に留学生の言語能力が高かったことによって肯定的評価につながった例が見られた。特に漢字の使用に関しては、FUIをした学生全員が「漢字は難しいので、初級レベルの学習者はあまり使用できないだろう」という考えを持っており、留学生の漢字使用に対する期待が低くなっている。外国人とのメール交換においては接触場面特有の規範⁶⁾があり、言語能力が低い場合でも必ずしも問題にならないことが分かる。

4-1-1-2. 社会言語的要素に関する評価

(1) 名前の呼び方〔バラエティーのルール〕

ペア7のメール交換では、1回目から4回目(往復2回)にかけて、名前の呼び方について明示的な相互調整が行われている(例1~例4)。NS7は1回目のメールで、自分に対して「さん」を付けず、名前だけで呼ぶように伝えているが(例1)、NNS7は直後のメールでは変更せず、さらにNS7からの調整があってから名前のみで書くようになった(例4)。FUIでNS7は「前と比べてフレンドリーな感じになって嬉しい」と、この変化について肯定的評価をしている。メール交換において、名前の呼び方は親しい関係を築くに当たって重要な役割を果たしていると言える。

【例1: メール】1回目9月28日(NS7→NNS7)](下線は筆者)

こんにちわ! (NNS7: 名前)さん(NS7: 名前)です。[中略]私(わたし)は友達から、“(NS7: 名前)”と呼(よ)ばれているので、(NNS7: 名前)さんも“(NS7: 名前)”で呼んでください(^u^)私は(NNS7: 名前)さんを何(なん)て呼べはいいですか?(NNS7: 名前)さんはニックネームありますか? [以下省略]

【例2: メール】〔2回目 10月1日 (NNS7 → NS7)〕

こんにちは〔NS7: 名前〕さん! 〔NNS7: 名前〕です。〔中略〕

PS: ニックネームがありません。〔NNS7: 名前〕でよんでください。

【例3: メール】〔3回目 10月2日 (NS7 → NNS7)〕

こんにちは。メールありがとう!! それじゃあ、今日から“(NNS7: 名前)”と呼びますね。(NNS7: 名前)も“(NS: 名前)”と呼んでください。〔中略〕このあいだ、友達(ともだち)と“トランスフォーマー”(Transformer)を見(み)ました。(NNS7: 名前)は見た? 〔以下省略〕

【例4: メール】〔4回目 10月9日 (NNS7 → NS7)〕(下線は筆者)

〔NS7: 名前〕、メールありがとう。〔中略〕今、お金がありません(>_<)。
〔中略〕〔NS7: 名前〕はよこはまに行ったことがありますか。〔以下省略〕

(2) メッセージフォーム〔形のルール〕

NS2はNNS2がメールの最初に「〔NS2 名前〕へ」として書き出しをつけていることに「フレンドリーであったかい感じがして良い」と肯定的評価をしている(例5)。

【例5: FUI】

〔NNS2: 名前〕が初めこういうふうに書いてきて、私もこういうふうにしたほうが、なんかあったかいなと思って、フレンドリーっていうか、あったかい感じがして。(NS2)

NS2が送った2回目までのメールでは、名前による呼びかけはなく、すぐに文章を書き始めていたが、3回目からは「〔NNS2: 名前〕へ」「〔NS2: 名前〕より」というようにメールの初めと終わりに相手の名前と自分の名前を書く調整行動が見られた。

NS2は友達とのコミュニケーションでは携帯電話のメールを主に利用

しており、メールの書き方に対する明確な規範がないことが分かる。

(3) メール文の長さ〔形のルール〕

会話においては、一人で話し過ぎるなどの行動はコミュニケーションの逸脱となる。メール交換では文の長さがこれに該当する。

NS4は留学生からの1回目のメール文が長かったことについて肯定的評価をしているが、NNS4からメールを受け取るまでは、メール交換は「短い会話を行う」という考えを持っており、2行程度の短いメールが来ると思ったと報告している(例6)。

【例6: FUI】

「今日何する?」みたいな短い会話が来るのかと思ったら、すごい長いメールが〔NNS4: 名前〕さんから来ていたので、お話? を読んでいる感じですごく面白かったです。(中略) チャットみたいな、そんな感じだったんですけど、やっぱり、パソコンでやるってことで、長いのが普通なんだろうなって(笑)(NS4)

これは、NS4が友達にメールを送る際、携帯電話のメールを主に利用していることが関係している。NS4はその後「電子メールのメールは長いのが普通である」と規範を変化させ、NNS4のメールの長さに合わせるという調整行動を行っている。NS4はメールの書き方に対する明確な規範がないと考えられる。

(4) 言語外の表現〔媒体のルール〕

メール交換で使用されている記号・顔文字は、言葉だけでは表せない言外の意味、感情を表現するために使われている。

NS7は1回目のメールから積極的に顔文字を使用しており(例1下線部分)、FUIで、NNS7が顔文字を使用したのを見て(例4下線部分)、「親しみが湧いてとても嬉しかった」と肯定的評価をしている。NS7は「顔文字の使用でもっと仲良くなって気軽に話せるようになると思った」と話し

ており、NNS7と早く親しい関係が築けるように事前調整をしていた。顔文字の使用は親密度を深める効果があると考えられる。

4-1-2. 否定的な評価

4-1-2-1. 言語的要素に関する評価

言語的要素においては、表記、文法、表現の誤用、漢字の使用に関して否定的な評価が見られた。

カタカナ語表記に関しては、英語の発音をそのまま日本語にした誤用が多く(例7)、「全く意味が分からなかった」と否定的評価がされている。

【例7: メール(抜粋)】(下線は筆者)

- ① 「スカルフをかいました」(NNS10) ⇒ スカルフ [scarf (スカーフ)]
- ② 「マクウプーラルクをしました」(NNS4) ⇒ マクウプーラルク
[make up (メイクアップ)]

また、文全体の意味が分からず、誤解が生じていたケースも見られた。意味の分からない誤用はコミュニケーション上の問題に発展する可能性があるので、英語で補足を入れるなどの事前調整も必要である。

漢字表記の誤用に関しては未習の漢字に変換ミスが多く見られた。

NS8はFUIで漢字の変換ミスは「辞書で調べれば防げる」と話しており、意味が推測できる誤用であっても否定的な評価をしている。メールは時間を共有しないため、事前に自分で調べることで誤用を防ぐことが可能である。表記の誤用に関しては母語場面に近い管理が行われる可能性がある。

さらに、FUIをした日本人学生全員が「留学生がどの程度漢字を知っているか分からないので困った」と述べており、漢字を使用する日本語でのメール交換の難しさが窺える。

4-1-2-2. 社会言語的要素に関する評価

(1) メールの頻度〔セッティングのルール〕

メール交換は基本的に1週間に1回行うこととしていた。しかし、NNSからNSへのメールが2週間以上遅れ、遅れた理由が分からない場合は「心配になった」、「何か気に障ることを言ったのかと悩んだ」などと強い否定的評価が見られた(例8、例9)。

【例8: FUI】

メールが1回、2~3週間来なくなった時は心配になりましたね。なんか、気に障ることを言っちゃったんじゃないかとか。(NS3)

【例9: FUI】

その子がどれだけメールしたいかとか、意欲が分からないのが難しかった。初めの方でメールが来なかったとき、ただ忙しいのか、書くのがめんどくさいのか、その辺が分からなかったの。(NS10)

メールは手紙と異なり、送信後、瞬時に送り先に届くという特徴があるため、メールの送信が遅れば遅れるほど心理的な不安が広がり、円滑なコミュニケーションに障害をきたすと考えられる。

特に未だ信頼関係が深まっていない前期にこの問題が起こると、明示的な調整がしにくく、問題を未解決のまま残すことになりかねない。NS3は「教師に相談する」という調整行動をとり、NS10はメールが来ないことには触れずに再度メールを送るなど、共に暗示的な調整行動を行っている。

(2) 誘いに対する返答〔内容のルール〕

NS3が3回目のメールで「お昼ご飯を一緒に食べよう」と誘ったが、次のNNS3のメールでは、この話題に全く触れられていなかった。誘いに対する応答がなかったことについて否定的な評価が見られている(例10)。

【例10: FUI】

「1回、ご飯食べようよ」って書いたんですけど、あんまり理解してな

かったのか、何にもなくて、スルーされちゃったんですよ (笑) (NS3)

対面場面では、このような問題が起こった場合、「すぐにもう 1 度聞く」などの調整がしやすいが、メール場面では相手の反応が見えないために調整が難しいと考えられる。NS3 は、この後、同様の「誘い」をしていないが、最後まで 1 度も会えなかったことを残念がっており、この時に会えていたらメール交換がさらに親密になったのではと話している。このペア以外にも、メール上で会う約束をしていたが、当日会えなかったことから、それ以降メール交換の回数が激減したケースが見られるなど、メール交換初期に「誘い」や「会う約束」が上手くいかなかった場合、その後の関係作りに大きな影響を与える可能性があると言える。

(3) 質問に対する返答〔内容のルール〕

NS5 は 1 つのトピックに 1 つ質問があった方が答えやすいと考え、メール交換でコミュニケーションが続くように質問文を多用している。しかし、NS5 の質問に対する NNS5 からの応答が少なかったため、否定的評価が見られた。

2 回目のメール交換 (NS5 → NNS5) で、NS5 は 11 のトピックを書き、全てのトピックについて質問文を使用している。しかし、NNS5 は 3 回目のメール交換 (NNS5 → NS5) でその中の 1 つの質問にしか答えていない。これについて NS5 は「興味がないのでは」と否定的評価をしており (例 11)、その後は質問を減らすという自己調整を行っている。

メール交換においても、通常のコミュニケーションと同様に、質問に対する返答が重要であると言える。

【例 11: FUI】

なんか、興味がないのか読んでも理解できない文章なのかなって思ったんですけど、でも興味がないのかなと思って、あんまり書かなくなりました。最後の方は。(NS5)

(4) メールの書き方〔形のルール〕

NNS8 はメール交換で自分の日常生活を日記のように書き綴っており、NS8 はこのメールの書き方について「初めは交換日記みたいで、メール交換らしくなかった」と述べており、否定的評価をしている。

NS8 はメール交換について、「できるだけ会話みたいにしたい」と述べており、一方的に自分のことを話すのはコミュニケーションとは言えないとしている（例 12）。メール交換は相互交流であるため、やりとりのないメールは否定的に評価されることが分かる。

【例 12: FUI】

言葉だったら当たり前前に会話してるじゃないですか。相手の言ったことに対して返してって。それスルーして、自分の言いたいことを言っても、キャッチボールじゃなくて、ただのピッチャー投球で、相手のボールは勝手に投げてみたい。好き勝手に同じ方向に投げてるみたいになっちゃうので。(NS8)

(5) メッセージフォーム〔形のルール〕

NS8 は NNS8 のメールが最初は堅かったと否定的に評価をしており、特にそのように感じた要因として、書き出しに名前を入れることを挙げている（例 13）。

【例 13: FUI】

初めはちょっと堅かったんですよ。向こうの書き方も必ず「〇〇さんへ」「〇〇より」とか、会社に送るとか、先生に送るメールみたいなんですよ。(中略)でも、日本人同士だったらしませんよね。友達同士だったら。もう分かってるじゃないですか。名前なんか省けますもんね。個性とすれば個性になると思うんですけど、なんか不自然ですよ。(NS8)

NS8 は FUI で英語のペンパルには「Dear」をつけると述べている。また、授業では日本語で電子メールを書くときにも同様の書き出しが必要で

あると習ったが、友達とのメールでは使わないと報告している。友達同士ではより自由なスタイルが親近感を感じさせることを示唆している。

4-1-3. 評価なし

意味の分かる文法、語彙の誤用に関しては、FUIで日本人学生全員が留意はしていたが、「意味が分かるから問題ない」、「特に気にならない」と答えており、文字コミュニケーションにおいても、接触場面であることから問題にならないことが分かる。

その他、日本人学生の名前を間違えて表記していたケースが3名に見られた。しかし、濁点の有無に関しては留意がなく、漢字の変換ミスに関しては「漢字が難しいから仕方がない」と否定的評価には至らなかった。

日本語の場合、誤った名前の表記は失礼にあたり、間違いが継続した場合、否定的評価につながる可能性がある。今後はメール交換が始まる前に注意を促す必要がある。

4-2. 後期に見られた評価

4-2-1. 肯定的な評価

4-2-1-2. 言語的要素に関する評価

「後期」に入ると、留学生のメールに変化が見られている。

言語的要素に関しては、特に留学生の漢字の使用が増えたことに対して肯定的評価が見られた(NS4、NS8、NS10)。これは、言語能力が高まったことへの評価に加え、日本人学生が漢字を使いやすくなったことが肯定的評価につながっていた。日本人学生は、前期では「振り仮名をつける」、「平仮名で書く」などの様々な調整行動を行っていたが、後期に入ると半数以上が「振り仮名」の使用を減らしていた。

前期は日本人学生が留学生の漢字能力に対する規範を持っていない状況であったが、「後期」は留学生の漢字に対する規範が明確になり、コミュニケーションがスムーズになっている。

4-2-1-2. 社会言語的要素に関する評価

(1) 文体の変化〔バラエティーのルール〕

FUIをした日本人学生6名が、留学生の文体の変化について肯定的評価をしていた(例14)。

【例14: FUI】

〔NNS8 (名前)〕さんが友達言葉になってくれたのが、すごく嬉しかった。自分の感覚が向こうにも持ってもらえたのかと思って。そうなりと話しやすくなりますよね。(NS8)

今回、留学生の文体使用の変化について加藤(2006a)を参考に分析した結果、1回目のメールでは、普通体より丁寧体の使用が多いケースが8名、丁寧体より普通体の使用が多いケースが2名であった。その後、徐々に普通体の使用が増え、最終回では、ほぼ全員が普通体の使用が丁寧体の使用を上回っていた。普通体の使用は友好関係を深める重要な役割を果たしていることが分かる。

(2) メールの内容〔内容のルール〕

NS2は、NNS2が11回目(全12回)に「異文化の違い」について書いたメールを読み、「すごい」と驚いており、「内容が濃くなった」と肯定的評価をしている。以前はNNS2のメールが日常的な話題が中心であったため、合わせて簡単なトピックを選んでいと報告している(例15)。

内容の変化がコミュニケーションの変化にもつながっている。

【例15: FUI】

最初はすごい一般的な会話っていうか、「週末はどう?」とか「どこの国が好き?」とかだったんですけど、後からもっと濃いついていうか。向こうが書いて来なかったら、私ももっと内容が薄いついて言ったら変なんですけど、もっと日常的なものをずっと書いてたと思います。内容があるっていうか、そんなのも打っていいんだなと思って。(NS2)

(3) メールの書き方〔形のルール〕

NS8は「前期」でNNS8とのメール交換を「交換日記みたい」と否定的な評価をしていたが、徐々に質問と応答のやりとりが増えて来たことにより、「仲良くなった感じがしてすごく嬉しかった」と、友達同士のメールらしくなったことについて肯定的評価をしている(例16)。

【例16: FUI】

質問が来て、メールらしくなったって思って。友達同士の。うちらでいう「明日の一日なんだったっけ?」とか、そんなレベルのものですよね。なので、すごく仲良くなったなって言う感じがして。その時はすごく嬉しかったんですよね。(NS8)

(4) メール文の長さ〔形のルール〕

ペア10では、平均して10行～15行程度の長さのメール交換が続いていたが、11月後半のメールで、NNS10から32行の長さのメールが送られた。メールが長いことについてNS10は「嬉しかった」と肯定的な評価をしている。その後、NS10からは「相手のメールの長さに合わせて書く」という調整行動が観察されており、「相手のメールが長いと、自分も長く書けて良い」と話している(例17)。メールが長いことは、より深いコミュニケーションにつながる事が窺える。

【例17: FUI】

やっぱ長いメールが来たら「おっ」と思って読むので、私もじゃあ、自分のこと書こうと思って、書けるような気持ちになりますね。(NS10)

4-2-1-3. 社会文化的要素に関する評価

FUIを行ったNS全員が留学生とのメール交換を通し、「留学生の生活が分かった」、「留学生の日本に対する考え方が分かった」など、異文化理解が進んだと肯定的評価をしていた。

メール交換に参加する日本人学生は異文化理解、異文化交流への関心が

高いため、メールの内容を充実させることが相互交流を目指したメール交換のさらなる発展につながるものと思われる。

4-2-2. 否定的な評価——普通体の使用〔バラエティーのルール〕

NS3 は NNS3 が 11 月後半に送ったメールについて、普通体の使用が不自然であるとともに、急に変化したことに驚いており、否定的な評価をしている（例 18）。

【例 18: FUI】

最初のメールに比べて最後らへんのメールが「～だった」とかになっていたんで、何だろうって思ったんですけど。別に全然嫌だとかそういうんじゃないんですけど、何でいきなり途中で変わっちゃったんだろうと思って、ちょっとびっくりしちゃいました。（NS3）

NS3 はメールを書く際に、普通体を使用し、「普通体の方が仲良くなれる」と述べている。しかし、NNS3 のメールでは、「グアムに行くだか」、「誰とグアムに行くか」などの友達との口頭表現としては不自然な表現が多く使用され、NNS3 は強い違和感を抱いていた。

文字を介した接触場面ではイントネーションなどの音声面の助けが得られないため、不自然さが強調されやすく、意味が分かる誤用でも、否定的評価につながりやすいと考えられる。

4-2-3. 評価なし

今回、「返信が来ない」（NS4）、「文体の誤用」（NS10）について、留意はしたが否定的評価がされない例が見られた。「返信が来ない」ことについては、日本人の友達にもあるとのことであり、母語規範が適用されると言える。また、「文体の誤用」については「かわいい」と評価されており、接触場面特有の規範が適用されていることが分かる。

5. 考察

5-1. メール交換の時期における評価

「前期」においては留学生と日本人学生の人間関係が構築されていないため、肯定的評価より否定的評価が多く見られた。また、日本人学生がメール交換を始める前に各自期待していたメール交換のスタイルと異なる場合に評価が行われていた。

今回、日本人学生の評価の中心となったのは友達らしいコミュニケーションであった。「前期」では、日本人学生が「名前の呼び方の調整」、「顔文字、記号の使用」、「普通体、友達言葉の使用」、など、留学生と早く親しくなれるように様々な調整行動を取っていた。これに留学生が応じた場合、または変化が見られた場合、肯定的評価につながったと考えられる。一方、「メールの送信が遅れる」、「質問や誘いに応じない」、「内容が一方的である」など、友好関係を築けない場合は否定的な評価につながっていた。

特に、メールの送信が遅れた場合は否定的評価の対象となることが多いので、「前期」でメールの送信が遅れている場合は、より早い段階で指導することが望まれる。

なお、「前期」は、留学生の言語能力が分からないため、多くの日本人学生から、自分の書いた日本語が理解してもらえないかどうか心配だったと報告があった。特に、漢字の使用には気を遣っている様子であった。メールは相手の反応が見えにくく、問題が起こってしまうと解決しにくいので、初級の学生の場合はできるだけ易しく書いてもらうなど、問題が起きないように事前調整をすることが大切である。

「後期」においては、メール交換を始めて約1ヶ月が経ち、人間関係が構築されて来ることにより、否定的評価が減り肯定的評価が多く見られた。

肯定的な評価は主に「普通体の使用頻度が増える」、「メールの内容が深まる」、「質問のやりとりが増える」などのコミュニケーションが深まって行く変化に対して見られた。

また、否定的評価は「前期」で徐々に調整され、解決されるものが多く、

「後期」では非常に少なくなっていた。「前期」で解決されなかった問題は、メール交換に慣れ、関係が構築されるにつれ、規範が変化したり、潜在化したりしたことによって、問題が意識されなくなったと考えられる。

5-2. 言語、社会言語、社会文化的要素についての評価

言語的要素に関しては、意味が分かる誤用には、留意はするが評価はされず、インターアクションの問題にはなっていなかった。しかし、意味が分かる場合でも、「漢字の変換ミス」のように、事前に自分で解決できるものは否定的に評価につながる可能性がある。漢字の問題に関しては、コンピューターによる辞書の使い方の指導などを行うことで、一部解決できると思われる。

また、コミュニケーションの障害となることから、意味が分からない誤用の多くは否定的な評価につながっていた。但し、言語能力の問題は全て解決できる問題ではないので、今回のように、後日フィードバックを行うことにより長期的な学習効果につなげることが重要である。なお、初級の学習者に対しては、不確かな表現については英語の訳を併記する、翻訳ソフトで確認させるなど、コミュニケーションを達成させるストラテジーの指導を行う必要がある。

社会言語的要素は今回最も多く評価の対象となった。中でも形のルールに関する評価が多く見られたが、これはメールの書き方、形式に関するものであり、メールの特徴が大きく影響している。

また、今回、日本人学生がメールの書き方に対する明確な規範を持っていない例が見られたが、この場合、日本人学生の期待或いは規範と異なっても、逸脱とはならず、肯定的に評価されている。今回日本人学生にFUIを行った結果、インターアクションを第一の目的としたメール交換は、ビジネスメールのような目的を持ったメールとは異なり、メールの書き方には特に決まったルールがないことが分かった。これは、日本人学生の友達同士の主なコミュニケーション手段が携帯電話のメールであること、日本人同士では友達になるためにメール交換をすることが日常的ではないことから、日本人学生はメール交換に対して規範を持っていないこと

が考えられる。

社会文化的要素に関しては主にメール交換を通して、留学生との意見交換、交流ができたことによる評価であった。日本人学生は「留学生の生活、考え方、異文化を知ることができた」、「友達ができた」の 2 点に関して満足度が高く、期待通りの相互交流が行われたと言える。

おわりに

今回の分析を通して、本研究の目的であるメール交換における 2 つの課題が明らかになった。まず、日本人学生が何を問題とし、何を問題としないのかについては、言語的要素、社会文化的要素に関する問題より、社会言語的要素に関する問題が対象となること、双方向のやりとりが見られない場合は問題となるなどの点が確認できた。また、問題があった場合は最初の約 1 ヶ月半で多くの問題が解決され、コミュニケーションが深まるにつれ、否定的評価が少なくなることが分かった。

今後は日本人学生と留学生を合わせた形で分析し、さらに電子メールにおけるインターアクションの特徴を探っていききたい。

注

- 1) ここでの「問題」とは、ネウストプニーを初めとする接触場面における言語研究によれば、場面の当事者によって否定的に評価された逸脱のことである(宮崎・マリOTT 2003)。また、接触場面における問題の類型については村岡(2006)の研究がある。
- 2) 言語管理理論については第 3 節で紹介する。
- 3) 実践日本語のコース概要はファン(2005)に詳しい。
- 4) 2007 年秋学期の授業期間は 9 月 17 日から 12 月 18 日までで、実践日本語の授業は 1 週間に 4 コマ(1 コマ 90 分)、合計 45 コマ行われた。
- 5) ネウストプニー(1982)は D・ハイムズのモデルをもとに、社会言語のルールを、「点火」、「セッティング」、「参加者」、「バラエティー」、「内容」、「形」、「媒体」、「操作」の 8 つに分類し、それぞれを定義している。
- 6) 加藤(2006 b)は言語管理理論の「規範」を次の 6 つに分類している。① 日本語母語規範 ② 相手言語規範 ③ 他言語規範 ④ 個人規範 ⑤ 共有規範 ⑥ 接触場面規範

参考文献

- 石田敏子(1996)「非漢字系日本語学習者の作文力の伸びの分析」『小出記念日本語教育研究会論文集』5号、29-48頁。
- 板倉ひろこ・中島祥子(2001)「IT時代における日本語教育——香港・鹿児島間の電子メール双方向プロジェクトワークの試み」『世界の日本語教育 日本語教育事情報告編』6号、227-240頁。
- 加藤好崇(2006a)「接触場面における文体・話題の社会言語規範」『東海大学留学生教育センター紀要』25号、1-18頁。
- (2006 b)「接触場面における規範の考察」『高見澤孟先生古希記念論文集』48-58頁。
- 北出慶子(2006)「非共時性コンピューター媒介インターアクションの特徴がもたらす第二言語習得への可能性」『ことばとそのひろがり』4号、115-138頁。
- 才田いずみ(1997)「電子メールを利用した日本語教育」『日本語学』16巻6号、94-100頁。
- 佐々木玲子(2008)「頼りがないのは悪い便り？」『日本経済新聞朝刊日経プラスワン』(2008年3月15日)。
- 中島和子(1993)「パソコン通信を活用した日本語教育——「書く力」を中心に」『日本語学』12巻13号、22-30頁。
- ネウストプニー、J. V. (1982)『外国人とのコミュニケーション』岩波新書。
- (1995)「日本語教育と言語管理」『阪大日本語研究』7号、67-82頁。
- ファン、S. K. (2005)「「実践日本語」におけるビジター・セッションの実施報告」『異文化コミュニケーション研究所共同研究プロジェクト 外語大における多文化共生——留学生支援の実践研究 研究成果報告書』(107-117頁) 神田外語大学。
- 宮崎里司・マリオット、H. 編(2003)『接触場面と日本語教育——ネウストプニーのインパクト』明治書院。
- 村岡英裕(2006)「接触場面における問題の類型」『接触場面の言語管理研究』4号、103-116頁。